怜野集

秋上

特別
イ4
3163
31(4)

貴
イ4
3163
31(4)

立秋
立秋朝
水邊立秋
早涼知秋
山家秋来
初秋夜
初秋松風
初秋扇
初秋落葉
田初秋
早秋白

驚立秋
立秋色
野立秋
風告秋
初秋
初秋露
初秋夜風
山中初秋
居所初秋
早秋
居所早秋

立秋天
立秋風
行路立秋
海邊秋来
初秋乙
初秋屯
初秋涙
岡初秋
里新秋
早秋風
原早秋

立秋露
立秋衣
立秋荻
閑居秋来
初秋朝
初秋待人
初秋懐
野初秋
山家初秋
早秋露
秦早秋

立秋夕
社頭立秋
立秋述懐
荒屋秋来
初秋夕
初秋風
初秋衣
森初秋
田家初秋
早秋雲
閑居早秋

里早秋　田家早秋　山家早秋　濱早秋　浦早秋

早秋萩　七夕　六日待七夕　待七夕　牛女悅秋来

六日　六日夜　七日待夕　七夕迎夜　七夕待

七夕夜　七夕惜夜　牛女年〻渡　今宵織女渡天河　乞巧奠

思牛女　夜思牛女　曉恩牛女　二星逢　二星適逢

織女契　織女契久　七夕幽恩　七夕眺望　二星朝秋

七夕月　七夕雲　雲織女衣　七夕風　七夕露

七夕霧　七夕雨　禁中七夕　七夕別人　旅宿七夕

七夕道　海邊七夕　水邊七夕　七夕心　七夕言志

七夕君　七夕文　七夕語　七夕涙　七夕恋

羨七夕　七夕草　七夕桂　七夕木　七夕川

七夕滝　七夕波　七夕瀬　七夕津　七夕渡

七夕綱　七夕舟　七夕橋　七夕水　七夕池

七夕田　七夕蝶　七夕鳥　七夕糸　七夕機

七夕錦　七夕衣　七夕袖　七夕領巾　七夕鬘

七夕枕　七夕焼物　七夕琴　七夕扇　七夕帯

七夕祈　七夕夜深　七夕暁　七夕晩　二星別

二星惜別　七夕後朝　八月九日　九日　閏七月七日

七夕祝　七夕庚申　寄七夕述懷　七夕懷旧　二星述懷

萩　萩風　萩風寒〻　萩告秋　萩知秋

初秋萩　驚萩　萩音高　聞萩　曉聞萩

月前萩　風前萩　夕萩　夕萩風　萩似人来　聞萩恋人

山家萩風　閑居萩　閑庭萩　故郷萩　荒宅萩
簷萩　暮秋萩　寄萩述懷　舊　社頭舊
舊風　暮秋舊　萩　萩盛　萩露
萩上露　萩露滋　萩露重　萩露如玉　月前萩
夕萩　夜萩　風前萩　雨中萩　恩萩
朝恩萩　雨夜恩萩　恩野萩　折萩　愛萩
翫萩　萩花移衣　萩開待人　萩盛意人　野萩
滿野萩　野徑萩　萩隱野徑　故郷萩　四宅萩
庭萩　籬庭萩　宿所萩　旅行翫萩　行路萩
依萩迴路　田家萩　秋情寄萩　秋色在萩　惜萩
萩歌歌　萩歌風　萩花落　野萩移　萩紅葉

女郎花　女郎花朝秋　女郎花初咲　霧隔女郎花　風前女郎花
女郎花風　女郎花離風　朝女郎花　夕女郎花　終日見女郎花
夜女郎花　女郎花帶露　女郎花艷露　女郎花多　蕊屋女郎花
野亭女郎花　野女郎花　離中女郎花　旅宿女郎花　宿所女郎花
山中女郎花　岡女郎花　野邊女郎花　水邊女郎花　他邊女郎花
折女郎花　愛女郎花　翫女郎花　女郎花留人　惜寄女郎花
惜女郎花　寄女郎花懷旧　寄女郎花述懷　薄　尾花同　載薄
薄出穂　初尾花　風前薄　薄隨風　薄離風
薄露　夕薄　尾花似浪　薄似袖　宿所尾花
野薄　哀薄　行路薄　古宅薄　閑居薄
閑庭薄　暮秋薄　秋興在尾花　尾花留人　刈萱

壁前刈萱　苅萱帯露　夕刈萱　古籬苅萱　寄刈萱述懷
蘭　水邊菜　所々蘭　菖蒲花　雨中蘭
菜露　野蘭　折折蘭　槿花朝顔同　極槿花
朝顔珍　山寺朝顔　露底槿花　曉更槿花　きちかう花
草花　草花　草花去秋　待草花　暮尋草花　尋野花
草花繁閑　朝見草花　夕見草花　近見野花　近對草花
風前草花　風動野花　月照草花　月前草花　雨中草花
草花帯露　秋花帯露閑　野花帯露　野花露　他邊草花
水邊草花　秋花　秋花色々　秋花催興　社頭秋花
野花　恩野花　野徑草花　野花好路　栽秋花
庭穢秋花　庭畫秋花　家穢野花　野花薫衣　野花染衣

秋花留人　野花留客　老見秋花　惜秋花　寄秋花懐旧
露　秋露　秋露重　秋露滋　朝露
朝露如玉　夕秋露　夜露　深夜露　露秋夜玉
露如玉　月前露　野露映月　月照草露　露寒々
露脆　悲露　憐露　雨後露　風前露
庭前露　庭草露　閑庭露滋　假庵露　故郷露
野露　野露如玉　野徑露滋　淺草露　野草帯露
野草露滋　草上露　草露如玉　露草葉玉　蕊中露
芝露　笹露　葉上露　袖露　袂露
露世人涙　客衣染露　客衣露重　旅宿露　別路露
蕎中露　山中露　山路露　名所露　海邊露

暮秋露　寄露祝　寄露懷舊　寄露述懷　秋風
聞秋風　驚秋風　秋風如浪　秋風涼　秋風漸寒
秋風寒　夕穐風　夜秋風　野秋風　野外秋風
野分　野路秋風　山秋風　深山秋風　蘇穐風
名所秋風　河上秋風　池邊秋風　海邊秋風　濱秋風
森秋風　闌路秋風　旅宿秋風　行路秋風　山路秋風
故郷秋風　田家秋風　山家秋風　幽居秋風　庭前秋風
竹間秋風　松上秋風　穐風催興　秋風歎老　暮秋穐風
虫　尋虫聲　虫恨　聞虫　終夜聞虫　思虫
虫思　霜夜虫　深夜聞虫　虫聲寒　夕虫　夜虫
寒夜虫　夜鈴虫　暁虫

經年聞虫　寢覺聞虫　月前虫　待月聞虫聲　雨中虫
風前虫聲　露底虫　虫聲非一　虫聲滋　虫為夜友
虫聲似人来　遇友聞虫　野虫　寒野虫　滿野虫聲
叢中夜虫　草虫　淺茅虫　虫鳴草花　河邊虫
山中松虫　古宮虫　故郷虫　古宅虫　幽居虫
荒庭蛬　閑庭蛬　庭夜虫　閑庭松虫　前栽放虫
草庵虫　園虫　閨虫　床間蛬　壁間虫
枕邊虫　旅宿虫　虫聲漸衰　虫聲欲枯　虫聲枯
暮秋虫　虫聲惜秋　松虫　鈴虫　蛬
促織　寄虫述懷　寄虫懷舊　蜩　萩盛待鹿
鹿遥　鹿　鹿聲期秋　鹿知秋　聞鹿

朝聞鹿　毎朝聞鹿　夕聞鹿　曉聞鹿　夜聞鹿聲
深夜聞鹿　終夜鹿聲　寢覺聞鹿　月前鹿　風前鹿
鹿聲比風　鹿聲比嵐　雨中鹿　鹿隱霧　霧中鹿
原鹿　野鹿　野夜鹿　哭鹿　田家聞鹿
樹間鹿　鹿交萩　鹿鳴秋萩　名所鹿　旅宿鹿
行路鹿　島鹿　夜泊鹿　鹿聲遠　近鹿
鹿聲兩方　鹿聲繁　山中夕鹿　聽聞山鹿
山家聞鹿　山家夕鹿　山居鹿　深山聞鹿　深山夕鹿
深山曉鹿　籬鹿　山路鹿　澗底鹿　嶺鹿
鹿聲留客　老聞鹿　鹿聲驚夢　鹿聲催涙　寄鹿述懷
暮秋鹿　秋望　秋眺望　北郷秋望　山邊秋望
野秋望　山路秋行　野外秋興　野秋興
仙家秋興　山中秋興　田家秋興　山家秋興
秋夕　秋夕天　秋夕月　秋夕風　秋夕雲
秋夕露　山中秋夕　深山秋夕　野径秋夕　森秋夕
海邊秋夕　濱秋夕　名所秋夕　山居秋夕　閑居秋夕
里秋夕　故郷秋夕　澤秋夕　秋夕情　秋夕思
秋夕傷心　秋夕催涙　老後秋夕　稲畫　秋田
秋山田　遠秋田　秋田風　秋田露　秋田庵
引板　稲花　稲　寄稲祝　稲田
秋夜　秋夜深　秋夜思　秋夜長　秋夜寒
秋夜嵐　秋夜露　野秋夜　秋夜宿野亭　閑中秋夜

惜秋夜　秋寝覚　秋夢　秋雨　秋時雨

蝦（かまづ）　小鷹狩　駒迎　駒引　開駒迎

月　秋月朗　秋月深光　待月　対山待月

対水待月　毎家待月　深夜待月　兼待月　久待月

待見月　見月　寄二見月　為秋見月　深夜見月

毎夜見月　連夜見月　終夜見月　閑見月　獨見月

獨対月　翫月　終夜翫月　連夜翫月　嶺上翫月

人家翫月　翫明月　池上翫月　駒月　夜二駒月

未出月　月初出　初昇月　漸昇月　傳手月

漸傾月　傾月　欹入月　惜入月　入月

八後慕月

拾遺集巻之四

秋々部上

立秋

後　打ちそふる物とぞ聞くきぬ衣秋の夕べの風の涼しく

同　紅葉ばの秋立日とはいひながらなほ残れる夏の色

代　今しとて風とはなきを秋ぞ物とあふぎ初めける

古　妹きぬとわがきそめしかたびらの袖ぬれぬれ風の吉ぶ

代　千しきのまふ色の今ぞ秋の始とぞ思ふる

清家　清家中の家々に秋きぬとわがいまぞふきそめる

金　とおもへば秋の風ぞ秋立日社深草の里

新　この夕べ秋のまふ小秋いき少しく軟きの風ぞ此日ふる

代　いにしへとなほふく風の分ふ秋の美ぶ

新　明日小いからるとなれ小秋風の吉ぶ秋いたみ

月　舊の家ぞ秋立々の中第一

夢立秋

立秋雨

立秋露

立秋夕

立秋朝

立秋色

立秋風

読人知
在原
貫之
武蔵
二条院讃岐
季通
太大臣
呼頼
六条

主婦衣

社頃主秋
水底主秋
野主秋
り絵主秋
主秋萩
主秋雲情
早涼ゑ秋
風出燈

海辺秋来

初秋天
初秋朝
初秋夕
初秋夜
初秋雲

初秋虫

初秋待人

初篠風

初篠松風

初秋夜風

初秋涼

初秋情

初秋衣

後拾

松むしの初秋さそふ秋風は吉野山をぞ吹てなりける　定家卿女

古今

家居して秋の風をまつ人の来ぬ夕ぞ秋の初めなりける　家持

新勅撰

高砂をこえ今はこゆらん秋の風ふけばぬぎ捨ぬ衣の袖の萩の上露の秋の初風　為家

続後撰

夜衣まだ袖にかさねぬ秋の来ぬ夢ぢ覚ぬ秋の風ぞ吹　定房

代々

いふかしな秋ふかしむ萩の葉の露の袖にもかぜ吹ぬ　少将内侍

拾遺

新勅撰の上年も来ぬ秋ぞ吹ぬ萩の葉の露の袖にもかぜ吹ぬ　定家

新勅撰

吹風の袖にもかぜ吹ぬ秋の初風　秀能

新勅撰

久堂の岩戸の関を吹ぬ秋の初風　好忠

後拾遺

秋風の吹ぬ夕ぞ思ひ出す嵐の山の秋の初風　俊頼

讀人不識

木の葉ぶかき袖の上に秋の初風吹ぬる夜の夢　公

古今

袖ぬれぬ秋の初風吹ぬる夜の夢ぢ覚て秋の初風　出法

初秋扇

山中初秋

関初秋

野初篠

春初秋

初秋夜聚

名所初秋

里初秋

山家初秋

田家初秋

田初秋

後拾遺

大ぞの秋の初風ふかなくに扇の風ぞ涼しかりける　為教

新勅撰

うたゝねの夢の袖ふかぬ扇の秋の初風　式子内親王

新勅撰

思ふ人の面影ぬ夢ぢ覚て秋の初風　資季

新勅撰

ぬぐ涼の関の葛葉ぬ夢ぢ覚て秋の初風　顕昭

千載

秋のくるかすみ立ぬ雲の下風ふかぬ夢ぢ覚て秋の初風　西行

新勅撰

きのふ吹ぬ夢ぢ覚て秋の初風　信川

代々

ふく風ふかぬ夢ぢ覚て秋の初風　家隆

新勅撰

涼しさの夢ぢ覚て秋の初風　後鳥羽

新勅撰

涼しさの夢ぢ覚て秋の初風　摂政

千載

涼しさの夢ぢ覚て秋の初風　藤原実氏

新勅撰

秋の初風ぬぎ捨ぬ夢ぢ覚て秋の初風　家隆

代々

ぬぎ捨ぬ夢ぢ覚て秋の初風　定家

新勅撰

山里の松の風ふかぬ夢ぢ覚て秋の初風　好忠

後拾遺

ふかぬ夢ぢ覚せばぬぎ捨ぬ夢ぢ覚て秋の初風　信実

早秋

早秋風

早秋雨

早秋夕

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

七夕

秋いきぬ立田の山もうそぶくまで　読人しらず
初霜置て今朝見れば紅葉の錦　関白左大臣
代ふかなるや扇の風ぞ涼しき　東三条入道
今はまた秋のきぬれば
さびしさの色はいかにぬ者ぞ　信実
後ぞ今ぞ秋ぞまさる紅葉　千里
初山里は萩のうら葉に風の音ぞ秋はあはれ　左京
有秋きぬと目にはさやかに見えねども　出羽
代と文ふみ見て秋の風　隆信
今はいたと萩の上葉は吉野山　後鳥羽院
初六月末つかた秋の上まで家を出る秋いきぬ　丹後
月夜は風を吹きもの夕べの風ぞ長き　伊大尼
代分ふ長く秋いきぬ　女房
初夕ぬ長き夜を涼しき国の長き秋の　鎌倉右大臣
続寄せて秋は八月末つかた　家季

寄月秋

寄月秋

寄月秋

久待七夕　能因

待七夕　顕季

牛女悦秋来　左良

たなばた　家持

たなばた　為綱

金　機女の苔衣ぬいとそぐ人をとくるかつまとをまて　能因

同　天川をもとをぬいとぎつるさをの夏のよりは　顕季

新　天河是会の夜ぞとうれしき秋の夏　左良

代　河のまの川とせの浪のたちて我立まちてあきさを　家持

金　機織の稀なる中を逢てとの数ハ多くの年やをぬらん　為綱

同　年ごとかまつる色をなを待ん秋のてをの七日やをう　仲実

男　秋の夜の月のうらぬや秋のひとをうらをを逢せぬ結ぶとハ　俊頼

古　秋風の吹すぎぬまつ久しの天の河波よむ立てまつと生こそ　公

後　秋ふかい川舟つるをとこ立こそ来る日のおもき　公

同　天川岩ぬと浪のたをく秋のうねのをとゆ　敦頼

新　夜是のり会ぬまつ久しの天の川原ぬ秋風ぞ吹　議食大臣

古　いたづらにまて久しの河原ををくやつてん　道雅

後　一年の色にをるをら久機のと舟ぬ小ぬ　小弁

七日待夕　小大君

たなばた　笑門

たなばた夜　読人しらず

七夕二待　東門院

七日夜　摂政太下

七夕惜夜　子関白

後　是ぞをるかのさひく糸の礼ぬをとをるをくの舟ぬ　不知

古　うねらぬのをを舟ををうんををの天の川舟ををるぐく　伝良

後　代をををを神ハををうんををぬの舟ををの天のをを長　大輔

代　くををぬををの秋をををを

牛女年に渡

今年織女渡二天河一

乞巧奠

黒牛女

夜黒牛女

暁の牛女

長 秋の夜の月なりぬるとなれば人のいとどあはれ

続 契りんなどいとねんごろなる人の天の河

代 人々の天の川なる歌ども

一 ものかは

定 見れどこそ見ぬ

今 歌いのるといひとりぬ

長 たまさかに逢ひたるたびたびなる

結 おもふ人わびぬ

初 織女の泣るなごりとわっぬ別といひぬれば

新 いとかなしかりけん

自 逢ふ瀬の嘆きは

代 昔ありけるかの人もかくぞ

長 結 ものかは

初 逢ふ瀬とは泣かぬ

讀人不知

宮治入道

定家

二星逢

二星遠逢

千 天川なる神こうぬる船暁のそら

万 袖ふる足と思ふらんこそ

今 天河なるのときこそ

音

万 ものかは

自 天川遠き渡りとなるまで

結 初尾葉

古 契りんなどいとねんごろ

代 織女いかに定めて

初 織めの我ぬるとも逢ふ

自 ものかは

結 一年に一度とは

続 天河まれなる逢ひとは

万 ものかは

新 逢ふ

長 秋上六

去 右大臣

長 長人

新 新撰

今 家持

自 奥座

結 左大臣

新 新撰

基 長

奏 之

第 新撰

長 長人

式 式部卿

織女

織女契久し

七夕樂思

七夕眺望

二星顧秋ヲ　高遠
七夕月　読人しらず
七夕露　公
雲織女衣　公
七夕風　定家
七夕霧　雅経

代　天の原ふみとゝろかす波の音に星の船出の秋ぞ来にける
古　天川紅葉を橋かけわたせばこゝぞ秋の河なみ
月　ひさかたの空にしられぬ秋の月ゆくへ
万　織女の舟のもとゝ漕ぎ出でて天の川なる秋の月かな
公　秋風の吹くにつけても白妙の天の川なる
拾　さゝ波の天の川とぞ聞ゆるかな人さま波をもてるとも
月　星合の空ふきこゝろのうらに秋をもふかるゝ天のとゝ
代　織女の手もとふかなりの衣にしかの音ゝ
野　星合の空ふきこゝろのうらに秋をもふかるゝ天のとゝ
月　老ぬとは人の衣のたまはりて秋のこゝろ
公　相機の天ぬく衣打ちなびく秋ぞ
月　心ぬるかな衣の裏まつるの天の川ぶく
代　こゝろぬるかな衣の裏まつるの天の川ぶく
後　天川ぬれて衣の裏まつるの天の川ぶく
月　天川ぬれて衣の裏まつるの天の川ぶく

七夕霧　経宣
七夕雨　定成卿
読人しらず
中正
宮珍
三川内侍
仁任
季経
俊性
也実
宣文
弘綱
守覚
五摩の御

野　ぬれぬれぬれ

七夕名　　恵茂
七夕出　　重房
七夕詠　　元任
七夕詩　　嵯峨天皇
七夕涙　　後宋
七夕愁　　後恵
　　高倉
　　李貞
　　平京
　　藤原
　　重之
　　讀人不知

七夕草　　美濃
七夕梶　　藤原定政
七夕木　　伊氏
七夕川　　東三条院
七夕滝　　作者不知
　　讀人不知
　　家隆
　　京方
　　讀人不知
　　長雄

美濃七夕

七夕草

七夕梶

七夕木

七夕川

七夕滝

七夕浪

七夕洲

七夕津

七夕渡

七夕綱

七夕舟

七夕橋

七夕礼

七夕池

七夕田

七夕楫

七夕島

七夕糸

七夕機

七夕錦

七夕衣

七夕袖

七夕領巾

七夕鬘

七夕枕

七夕焼物

七夕葉

七夕扇

七夕琴

七夕祈

七夕夜深

七夕早朝

七夕焼

二星別　宗于

二星惜別　いにしへの

七夕後朝　伊勢

八月　重保

九月　読人しらず

菊七月　美濃

七夕祝　仁和寺宮

七夕懐旧　延喜帝

寄二七夕一述懐　内大臣

七夕懐旧　中務

二星を述懐　義孝

九月　清原

七夕懐旧　元輔

二星を述懐　伊勢

寄二七夕一述懐　重保

七夕懐旧　読人しらず

二星を述懐　有定

九月　左近侍

菊七月　元輔

七夕祝　佐理

七夕懐旧　友則

寄二七夕一述懐　義孝

七夕懐旧　清原

二星を述懐　信実

萩

萩風

萩風寒し

萩先秋ナ

萩知秋

初秋萩

散る萩

萩ちる高し

関萩

咲く萩

月の萩

風前萩

夕萩

夕萩風

萩以来

関萩　後徳大寺

山家萩風　後恵

系五萩　西行

閑庭萩　弘季

古郷萩　法性寺入道

荒屋萩　宮内卿

簷萩　小大進

著杜萩　大輔

寄萩恋懐　読人不知

野辺の萩の葉ゆるがぬ風ふけばこぼれて浪の音ぞ乱るる

萩の葉に風わたるなり秋の夕べ

いとふもをしてなびかぬ萩の夕風

秋のきはまりて萩の上風ぞ吹くなる

萩のうへ風のはらるる夕べ

さびしの色ぞ山里ふかきてやかる萩の上ぶり

秋なれる宿の萩のうへ風ぞ秋の夕べ

ながめて詠る宿の萩のうへ風ぞ

ながめ入る宿の夕まぐれ過ぎぬるる萩のうへ

歳秋の風の吉うとあはれ

代来ぬ人ぞ待つ宿の萩のうへ

今さびしさふ秋の色ぞ

風の音ふかぐの萩のうへ

月ものいとはうそぬる庭の面ふかの拾の音ぞ

いふせむいせの浦萩みぐるぬ波ふかれ

野辺の萩の葉ゆるがぬ風ふけばこぼれて浪の音ぞ乱るる　家持

古ちるもづる神のいづるよりとわたるなり　歌之

野辺の萩の葉ゆるがぬ風ふけばこぼれて浪の音ぞ乱るる　弘綱

代風ふき秋くるもの葛の葉ゆるがぬ風ふけばこぼれて浪の音ぞ乱るる　元輔

月夕ぐれの今の世ぞ乱るる　讀人不知

今立ちくべ歌えるもとこそせこぞう年秋萩花咲ふらう　仝

物白露のいとをぬき萩ぬ不紅葉衣ふうる秋もきふらう　在原業

代鶯鳴くなく秋萩ちるびまもねく家のおう恩日ぬれ　紀貫之内侍

月秋ぬ物ならくとうまれぬ萩のこころ家ぬ人ぬ　萬山院

金小萩系白人戚ハもう家ぬ人ぬ人ぬ人ぬ　りゐ

物さ河うれ芽ぬ物ぬ物ぬ安城野のかあの小萩花越　小弁

古萩の家玉ふねうんと宝ぬ宝ぬ宝ぬ人ぬ枝ぬ　読人しらず

月ぬるうる人の浦ぬ萩ぬ人ぬ家ぬ萩ぬ　仝

拾うふらしむと宝ふちま秋萩ぬ宝ぬ宝ぬ宝ぬ宝ぬ　伊勢

萩上露

蘇嘉藤

萩露重

蘇嘉藤

月前蘇

夕萩

初　知まぢ江堂ぬぢとえん　蘇花と葉の寄れこぢれんぢる　浮世

代　ふたるこ[illegible]寄の波や秋萩の下葉ぬづる寄とちつな　不義後人

月　恋寄の美ふ出り秋萩や枯らくさの秋うるつん　道助

月　さ江寄の知ちのぢれ秋蘇ふもとえるまぢおるる心寄　家持

仝　秋の秋ふさける秋萩姫風ふうぢるこ小蘇の寄ふく　仝

古　わてこび為ぢちぬ寄れ秋萩の枝ん[illegible]ふる心寄　後人今矢

後　秋萩の枝ん江ふ為りいちこ寄ふくちぢ[illegible]ら　月

後　人ちぢ切江やらこ秋萩のねるぢ[illegible]て寄ぢこぢ　中納言女王

代　花ふ[illegible]く寄江ちづこちら美のまの萩ふちれ[illegible]合　鎌倉右大臣

月　秋萩ふ切る心寄[illegible]ふ[illegible]こ寄　[illegible]実今[illegible]

代　蘇蘇よらぢ[illegible]ふる寄の考ちこ切る波こう　[illegible]

後　義世て後ら[illegible]ん寄ぬぢ[illegible]の秋萩こぢ月　保[illegible]父

野　[illegible]花のかわのこ萩咲こちら秋ふ[illegible]月ぢ秋　摂政

代　ちこぢちいぢこ[illegible]ん寄姫の萩が花寄秋の夕[illegible]ら　後伯太寺

夜萩

風寄萩

雨中萩

田ふ秋

朝田萩

月花田萩

心野萩

初萩

愛ふ秋

散ふ萩

萩ふ移ル

後　まぢ音ふ秋ふる萩ふふ[illegible]ぢて亜ぢる寄ふ社　新左衛門

代　清月ぶふ河ぢよこ[illegible]ふる秋萩の寄ふ為と風のちわん　大蔵三位

月　秋の月よぶこれ萩の枝ちこぢこ[illegible]ふる寄の　羽院

月　秋風い秋ぢふ[illegible]ぢる砂の屋ふの萩ちこ[illegible]　家持

仝　さいのぢ[illegible]ぢ風ちこさぢこの野ぢの秋萩ちちん[illegible]　為家

後　[illegible]ぢんぬぢ[illegible]ん寄ぬぢ[illegible]わふの小萩ふ[illegible]ぬ　也[illegible]

代　桂寄のちこうぢれて時ぢ[illegible]ぢ野ふの小萩萩寄ぬぢ　墨俣

月　さ江こ[illegible]れ書ふ[illegible]ちる寄ちやまの萩ふ崇ふ[illegible]　小弁

後　切[illegible]ふ[illegible]ぢ人よこ[illegible]わんぢ寄ぢ江こちる秋ぢ　後人今矢

接　寄ふ[illegible]て寄寄ちまの[illegible]ぢれ[illegible]ちん秋萩の寄　美濃

形　秋萩ち切ぢ[illegible]ぢ月寄の萩ぢら[illegible]寄ふ切ちこ　永縁

後接　[illegible]ちこ寄江ちこ[illegible]ふる寄の秋萩寄こ[illegible]ぢ　原公

月　蘇萩江こ[illegible]ふ[illegible]ぢ秋萩寄こ[illegible]ぢ下紫ふ[illegible]の寄ふ　後人今矢

月　ふりびわふの袖ふ[illegible]ぢ[illegible]ぢ[illegible]ぢ萩ぢ　[illegible]ぢる　笑昭

萩に待て人　　下野

萩の葉　　読人しらず

野　萩　　拾遺

陽野萩　　為氏

聖種萩　　世尊寺

萩隨聖種　　定邦

故郷萩　　紀信

代　家づとに小萩が末小ちとられば萩どう衣さ敷人ぞなれ　　読人しらず

別　我宿の萩咲小ちらぬまふくさてこもせうれ　　拾遺

代　いとしく又為るる小秋萩の古萩の花咲変らるもぞ　　仁和の御製

今　とうれ庭の秋萩家々の色ら語る者いわしば成　　拾遺

代　おなじ人ちらせまりき家の萩の盛を　　恵慶法師

別　秋風い涼しく成れるぞ　　讀人不知

続　秋の来れ萩の錦とき咲ぞ　　色葉

代　ちら家々紅ひ小ちらる園の萩ちせ小さる秋萩の色　　為氏

後　りゆりわてぞ心勢おく庭ちとて変ぞの秋萩　　世尊寺

月　小萩咲ぞとなりちら衣ちら秋きれ萩ちもて　　定邦

代　ちら家小ちぞ秋萩わて色るとのくちぞふ　　紀信

別　萩家の色ふ位の秋萩萩い咲て萩小花ちも色て　　実人

続　古位のかわれ小萩いきぞふ色るぞ人すふ咲ちる　　拾遺

代　ちる位れ萩の小葉ぞ色家のこ浅き秋の恨り　　忠信

旧宅萩　　篤家乳母

庵萩　　宗于

蓬庵萩　　俊親

茅所萩　　元仲

結り敷萩　　宗家

り絡萩　　

代　萩興絡ち　　

田家萩　　

妹情寄萩　　色葉

杜宮在萩　　内大臣

惜萩　　読人しらず

別　家々の色ちとられば色見ぬ者の杜萩　　

後　ちら家々ゆきそ色見ぬ者の杜萩　　

後　家宿の庭れ秋萩萩ぬ者ゆ浅ちん人やちと　　

別　色ぞ庭ちち者の萩ぞきわもこそほど庭る秋萩の　　

別　白家い色小ちら秋萩協聖のかわのこ萩来こ来ぞ　　

代　読ぞのちるち棒ちらしまの聖ぞの杜萩のく邸　　

別　家杜萩の当ちとこ色汗衣小白沙の萩ちら　　

別　ちるのぞ小聖の久家ちとこ足こてちちる秋萩の　　

代　家ちれぬ萩の小萩咲小ちりちこ人の袖白ぞ　　

別　ちちぞと語ぞ久せば高萩家ちぞむ庶久ちる袖ぞ　　

別　秋田ちる如ちの高ち白人ぞ萩ちる杜萩ちれどわぬ久　　

代　とちる色久咲白ちちい山田のちちはの者の杜萩の家　　

別　紀家ぞ家ち長ちる萩ぞ萩ぞ色ぞ家ちてちる秋　　

代　家者の萩の下葉の白ちの秋萩萩ぞ色ぞ秋　　

別　秋風い白小ちち咲ぞ家ちる色ぞの聖ぞの杜萩ちちぞ沙色

篠家乳母

宗于

俊親

元仲

宗家

色葉

篠倉大臣

敦季

内大臣

読人しらず

源政

内侍

右衛

実人

萩露義
萩葉風
萩葉雨
野萩移
萩下葉

女郎花

秋の野に笹分け行く萩の露
袖にかけ置きもむ枝ぶりを
我園の萩の花風吹くなり
古葉ゆゑ秋風吹くと小わぎの
初霜ぞ白菊おきて言葉の
代知るべく白菊おきて言葉の
古秋は来ぬ夜ごとうなる小萩の
代梓弓引きもぢ小萩小萩
古花の笠ぬ乱れ咲きぬれど人
古種の人語るとうい女郎花我
今秋の野に小萩まじりて女郎
後女郎花秋の野に小萩まじりて
女郎花秋の野に小萩まじりて
後秋の野に小萩まじりて女郎
今女郎花

家持
利長
大伴卿
読人不知
季賀
家園自
後人丸
伊勢
賀茂
忠岑
亀昭
後人丸
今
奥風

女郎花朝露

後秋の野に小萩まじりて女郎
後相模小萩まじりて女郎花
野後撰小萩まじりて女郎花
古我岩小萩まじりて女郎花
古人の見るまで逢ひて女郎
今風に女郎花

後人の見るまで逢ひて女郎
後女郎花以色てる秋風いと
代何とうく吹色てり秋風
代わづ野の女郎花秋風
女郎花秋風の吹くなる女郎花
女郎花秋風の吹くなる女郎
女郎花秋風の吹くなる女郎
後女郎花秋の野風小萩
代女郎花秋の野風小萩
後石家の女郎花秋風
後人丸の女郎花秋風

人の知いひさぶらふ
後相模
野後撰
古
今
後
代
後
後
後
後
後
後
後
後
後
後
後
後
後

面影
定方
美濃
小野小町
智証
忠岑
躬恒
経盛
基俊
雅経
左大臣
摂政
読人不知
右大臣

女郎花

秋上十六

[illegible]

夜女郎花

女郎花ひるは人もとはぬ秋の夜の月の光はもるとなして　呉能　読人不知

女郎花帯ぶる秋の野辺小ぶるまに女郎花人もとはぬと思へば　読人不知

[illegible]人のこゝろ女郎花の秋を待つらん　賞之

女郎花色にのみ出でぬる物思ひ女郎花いふ人の心を　読人不知　経忠

[illegible]　季廣

[illegible]　後出

女郎花[illegible]　[illegible]

[illegible]　重綱王

[illegible]　肥後

野辺女郎花　[illegible]　賞之　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

地蓮女命歌

打ぬ命兼

季廣

慶女命花

小野忠大政

歌ぬ命歌

通昭

女命花蓮人

貴人歌

情歌ぬ命歌

藤人歌

情女命歌

寄女命花懐舊

寄女命花述懐

尾花同

薄

載藤

藤生穂

秋上十八

初尾花　隆祐

風吹　花輔

秋風に　読人しらず

薄露　信実

代々枕詞と書て続く初尾花秋のさうへいでとなりへで
月　花の枝の秋ふかき露のしたもみぢ秋へきぬ
接　秋風に　秋風のつらく花落り方をすぐまもくなんん
野　野べ小萩　花落る秋風に　花落る
古　花ちる　花ちる　秋風のつき小萩をれ
合　秋風の　秋風のつき小萩をれ
続　花落す　花落す　花落す
月　宮もすき　秋の野風　秋の野風
吹ぬまも　吹ぬまも　吹ぬまも
古　まもくこそ　まもくこそ　まもくこそ
代　ちる　ちる　ちる
野　花ちる　花ちる　花ちる
合　ちるの　ちるの　ちるの
月　花落ぬ　花落ぬ　花落ぬ

夕薄　昌叔

尾花に浪　読人しらず

薄に袖　信実

花所尾花　信実

野薄　信実

月　花の枝の秋ふかき露の
野　小萩の野べの
代　ちるの
古　秋の野の
合　うづ
接　ちる
続　紅葉
古　秋の野
合　秋の野
月　色ぞ
続　秋の
古　秋の
代　花ぬ
合　秋の
月　まもる

秋ふかき露の
秋の
秋の
秋

暮秋薄　結

秋奥女　尾花

苅萱　苗人

風前苅萱

苅萱

苅萱

古縁苅萱

寄苅萱恋懐

蘭

水色蘭

所之蘭

葉花所

雨中蘭

蘭嘉

野葉

杉葉

槿花 朝顔同

垣槿 兼

朝顔孫シ

山寺新記

嵯峨庵槿 宗

晩交槿花

[illegible]

草花

草兼 [illegible]

待宗 [illegible]

草詩草花

[illegible]

草宗 [illegible]

朝見草花

白見草宗

[illegible]

近見野草　代　秋の野に人まねかずとも萩が花　後法大寺
近郊草花　続　秋山の錦織なる萩の花　伊勢
風前草花　後撰　妹がかたみとてにぞ見る　慶運
風動草花　新　なよなよいとなる萩の花　良平
　　　

野種草花
野辺の妹路
載秋歌

後拾遺 紀友則
いにしへよりしらぬ花のうゑしゝ家なれば
さらぬだに秋の野辺のなつかしき
秋の野はかれぬるかぎりなつかしき
後拾遺 紀貫之
なでしこ種をまくとて
白露の玉かとみるまでに
秋の野の草の花ぞいろいろ
後拾遺 紀貫之
秋の野の草の花ぞいろいろ
秋の野の草の花ぞいろいろ
良暹
恒朱
雅経
[illegible]
元輔
撰政
元真
関白の左大臣
[illegible]
新家
勝命
信輔
呼光

移秋草
庭畫條花

つぎ家に花をうゑて種をまく
家移野花

秋の野の草の花ぞいろいろ
うゑ種て花いとなつかしき
こ歌原石かさねぐ移種て庭の草のまどをまもる
京宗
大輔
行恒
戸の内侍
花安
忠岳
後教
讀人不知
義忠
家持
清輔
菱麻大政
[illegible]

野原草花
野辺花咲家
秋草前人
野花留客

古見秋草
惜秋草
寄秋草懐旧
露

花の露さびしき石小種ひてま移すものゝ人や恋しき
秋の野の草の花ぞいろいろ
秋の野の草の花ぞいろいろ
秋の野の草の花ぞいろいろ

秋露

杜露重シ　太上天皇

煙露濃シ　藤原為家

朝露　後鳥羽院

朝露消ヌ　藤原俊成

夕秋露　藤原定家

夜露　藤原家隆

深秋露

新　秋の来てたてる月の光かは色もてる露をとそとれば消ぬるもてる露を色もてる露を秋せもぐかぎの萩小置露消さぬ小月の明ぬ

千　何と知く袖の白つゆ秋の来る月に露をうつす袖かな

新　秋の来る月に露をうつす袖かな

続　秋の来て月の光かは色もてる萩の下葉小月小

月照露　後　萩葉葉末小結ぶ露を宿る月哉

新　峰の月の光はさやかに白露の玉の数をかぞへ

今　煙の晴れ露色まさる葉末かな

代　中の月の光はさやかに白露の玉の数をかぞへ

代　露色はいとしきものを秋萩の下葉小露の色は

代　見そめる方の秋をうらふる後葉を葉の露の色

後　世なの紅きことはきくれなゐ小色白露の色そ深や

新　秋風小うごく袖葉の末ごと小色白露の色の玉中

情　秋風小露の玉

後人麻呂

和泉式部

読人知

親盛

通具

法性寺道

親盛

宗

宰相

為経

俊成

和泉

守文

輝光

雨後露
風前露

庵前露
庭草露
閑庵露
假庵露

故郷露
野露

万　かゝぢの面打ふれば袖の露ぞうれの白珠　作者不詳
拾　風ふくべ雲もなびけるこ萩原紅の花のみさをよ　登蓮
代　吹きまがへる雲の花ぞ　り家
月　秋ふかぬ風にたなびく雲の花ぞ　具平親王
万　秋ふかぬ萩のえ風の強せねいろだら雲の玉とぬくらん　清人
万　家前のを花も玉雲ふきたれぬこもちまくに見む　紀貫之
古　秋ぞこいきまぜりそ家前の草と藤ら家と藤ら　紀貫之
野　庭の面ふ成る蓬ふことをせてのようかる雲ぞ　藤原俊成
万　秋田るかりおを俤ら家とんべ衣を衣ふ家ぞ　藤原人麻呂
古　山田りる秋のら庵ふ白ふ家いよ家せ白の浪ぬ　忠岑
後　秋の田ぬり秋の庵の苦とわゝ家衣ふ家ふ袖て　左京大夫
古　君ゆゝ昔ふ家ら古の紅の花ぞ袖のひづ華　業平
後　秋の露ふ庵ふ白の消ぎべ玉ぬまてゝ家てゝ家ては　読人不知
拾　梅雨の庵ふ白ふ露の秋萩ふ白ふ家ふ家ふ　栗ふ
後　秋の露ふ白ふ露ぞ消て消ん家の白ふ　現範

野露ぞ白玉
野徑露滋
淺茅露
野草露
野草露
草上露
草露ぞ白玉

代　秋萩ぞ露ぞ白ふ白ふ　梅ふ白ふ露ぞ白ふ　武子内親王
古　秋の露ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　朝家
後　さゝがよの白ぐ淺茅の東ごとふ乱てゆる白ふ白ふ白ふ　長能
古　ゝさゝ白ひゝゝさとゆせ武蔵の末の下ふ白ふ白ふ白ふ
後　秋の露ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　良暹
野　秋といぐ鞘ぞて結ぐ笑わさぐ家の白ふ白ふ白ふ白ふ　惠慶
代　等家のを野の淺茅ふ白ふ家ふ家ふ家ふ家ふ家ふ家ふ　定家
金　ゝ白葛ゝ白ゝわぐの大野の白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　長家
物　ゆ白ら家萩の乱ぐら白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　り家
野　秋の野ぬ乱ふ家ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　長實
後　家ゝ白ぬ家ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　忠國
後拾　秋ゝ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　為忠
野　ゝ白ゝ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　大武ゝ佐
後　秋の野ぬ乱ふ家ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ白ふ　業ゝ
露ぞ白玉

露草玉　　長明

叢中露　　業平

草露　　堀川

草露　　讀人不知

葉上露　　季經

袖露　　圓位

杖露　　長明

露世人涙　　業平

宿露　　堀川

宿露　　讀人不知

旅宿露　　季經

別袖露　　圓位

羇中露

山中露　　家隆

山路露　　読人不知

岩根露　　素覆

海辺露　　基俊

草枕露　　小野

寄露懐旧　　鎌倉右大臣

草露述懐　　読人不知

秋風

後撰　秋の来ぬと聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　素覆

新古今　秋の来ぬ袖の露にぞ思ひ知る　　家隆

同　ことわりの涙ぞ袖に露ぬれて　　読人不知

後拾　いとれ秋の萩の露ぬれ　　素覆

新古今　この葉の葉の露ぬれ　　衡

代　かの女子の色の色ぬれ　　遠保の娘

後　わきて見る秋しうれば白露のうつろひ　　陸奥

続　見るとき秋の来ぬるよりはやもとどまらぬ露の　　り宗

金葉　代の松の上に秋の来ぬ　　俊頼

新　結ぶ風の音の秋ぞ来ぬ　　小野

千　奏聞せしめ給ひ　　基俊

新　世の人の見るとの後の露の　　鎌倉右大臣

後　秋風の吹くとぞ思ひ知る　　読人不知

聞秋風

詞　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　和泉式部

新　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　太上天皇

古　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　家隆

代　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　いつ子

仝　清涼殿の萩の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　後鳥羽院

月　月の光の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　新　忠

後拾　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　摂政

千　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　基俊

新　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　入道前関白太政

後拾　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　読人不知

後　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　同

古　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　仝

代　秋の来ぬ袖の露の風を聞くより井の水の底まで通る秋の風かな　　重之

驚秋風

杜風吹来

炎風涼

杜風衝寒

嵐風寒き夕秋風　讀人不知

夜秋風　通俊

野外秋風　重保

野分　淑望

野分　李通

山秋風　定家

原山秋風　伊忠

海邊秋風　定家

河上秋風　為綱

池邊秋風　呼牧

海邊秋風　後人不知

寒秋風　材昌

森林嵐風　基俊

関係秋風　代　後撰　秋風小川音とみねに吹くなるなり　重頼　純因△

旅の宿秋風　野　秋風の実に吹くるこゑ小ちさ　出見

山路秋風　千　何とかく地に吹きぬき秋風の分け来る草の葉の露　仁上△

田家秋風　野　さらぬだに小秋の旅のいとゆき小松ふるの家の山ぜ　秀能

り　旅人の秋に吹くと秋風は夕日さびしまのうけ　定家

山路秋風　〃　初瀬山夕越えて者とぐ三輪の檜原小秋風吹く　禅性△

在郷秋風　月　秋風に降の門田のくくと鳴くむ　有房

田家秋風　代　玉穂の稲の葉ぶ打うぐまふる民部小秋風ぞ吹く　後鳥羽院

金　夕されば門田のいなば音立て葉のまぶや秋風ぞ吹く　経信

月　者をさ山田のひろ小てくくぐ吹く秋風よまぜてぞ　頼家

野　秋風ぞ野辺の風のてはをこ山田のひをまぜてぞ　定房

〃　つきそぐ者る秋の色を見いるぐ小沼る秋のぜ　慈円△

続　夢ぞ見ね当の音の夕されぐ山ぐの風ぞ者のぐぞ　り宗

山家秋風

幽居秋風　月　ひまぐ風者の門田小者山ぬ、こゑぬ分ぬ山秋の初風　雄宝

意家の秋風　後撰　山里の秋のわびしさ人ぬ者ぬ風のぜ　郁子

秋月小　野　秋ぐ小吹嵐小ぐ山ぐ部ぐ秋いぐぐ　後法大寺

代　家ぐ山ぐ蓬ぐ山ぐの月ぐ見えて古ぐ枕ぐ秋風ぞ　兼蓬△

秋月　野　我者のと見ぐ家の白ぐ家の白ぐ山の音一日ぐ秋風の吹く　家持

代　さ山ぐ山ぐ者ぐ小ぐ山ぐ者ぐ秋の風ぐ者ぐ者ぐ秋の秋さ　好忠

続　ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ　宗于

代　秋風ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ　貞平堅

後撰　まつの者小風の吹く秋の聖ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ　忠岑

月　白者小風の吹く秋の聖ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ　朝康

代　秋風の吹く小ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ　恵慶△

後撰　萩の風ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ　長能

野　妹風の者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ　読人しらず

古　秋の野小人まつの者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ

萩上二十九

野辺秋風

月　萩の者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ

妹風　野　妹風の者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ

妹風歌老　代　妹風の者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ

杜風歌老　月　杜風の者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ者ぐ

虫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

待月聞虫聲　　動

菊中虫　　万

風寒草深　　野

鐘聲遠　　侯

虫声仮人来　　代

遇芝園虫　　侯

野虫　　代

寒野虫　　侯

満野虫聲　　侯

叢中夜虫　　侯

草虫　　侯

蔵芽虫　　侯

虫鳴　　侯

川邊虫　仲頼
山中　松虫　讀人不知
古寺虫　能因
故郷　虫　道命

古宅虫
幽居虫

菖蒲菴
不尾菴
庭夜虫
閑居松虫

月
菖蒲と淀野の菅小菴ものがたるなるべしとやうん
後撰　くらべこしの山ふかみ人まつ虫の声ごとに
代　古今　のるなるの山ふかみ人まつ虫の声ごとに秋はきにけり
古寺　荒れまさる草ふかみつるの古にはれ
後撰　つるにはあさ茅ぶかしと荒れまさるの虫の声のみぞ
金　聞くるかなわれもまた年ふりて物思ふ宿の秋の夜
代　古今　秋の根づたに伝ひて宿る浅茅生の
千　宗貞　蓮ごとの虫すだくなり
野　人はいさ心も知らず故郷の花ぞ昔の
古　人の袖ぞ昔の香ぞする

月
秋の夜の蓮ごとに宿る虫の声ぞ聞くなる
金　つぐ為小菅せる岩小ぬるの
秋風や蓮の岩小ぬるの
夕月とんとたれか小石の
古　ものとなる家岩小ぬるの

宗栽
草庵虫

園虫
園虫
庭虫
壁間虫
枕虫
旅宿虫

月
後撰　秋ごとに草の枕を結ぶ虫のなくこえ
代　秋ごとに草の枕を結ぶ虫のなくこえ
続　ちぐの秋小わびぬる草の花園を
月　秋ごとの中なる草いたまで草の
千　秋ごとの中なる草いたまで草の
代　草ごとの中小ぬる草の
今　草ごとの中小ぬる草の
金　草ごとの枕の草小ぬる草の
詞　古にかくてさぶらひて草に秋の枕の下小鳴く
月　つるさとのくぬ草の枕に草の
月　草小ぬる草の枕に草ぞ
千　秋風や草の枕に草ぞ
後撰　秋風や草の枕に草ぞ
千　秋風や草の枕に草ぞ

い世　讀人不知
高遠
肥後
定延
花山院
兵衛
家茂
六条
為仲
衛
宣平
遠衛
大炊御門
右大臣

虫奇歌秋ト
虫奇秋
野蕎秋虫
虫聲惜秋
松虫
鈴虫
蕎

野蕎秋を小秋のうまれかはりとなり
秋風小夜ふけまさるもの思ひにくれゆくかたの
嵐風の音吹しくべき蕎むぎの蓮の花ちるかな
月見草さきそめし秋の蕎麦の花白くかほるい
続秋くれぬ虫の音のよわくなりゆくさびしさ
月しの秋を待つ蕎麦の小家さへ独ぬれ
後さんといひし程やこの秋の独ぬれ
秋ぬれの秋はまつ虫ばかりなる
什蕎麦の秋はまつ虫ばかりなる
什蕎麦の秋はまつ虫ばかりなる
什蕎麦の

雁

万葉集に雁の山に帰る雁のと云へるは秋の山に帰る雁なるべし

今は雁なき渡る秋萩の花咲きにけり

雁の書とも云ふべし

古今集の歌に雁の鳴く音聞くなる秋の田の穂末の露の玉と散るかな

妹の弟に妻を死なせたる者に書を送りて慰めたる

後撰 秋の野に妻呼ぶ雁の音聞くは物思ふ人の心なりけり

雁歌のさくしに出でぬ歌の時和歌に記入おのづから多

続古今 雁なき渡る雁の中に秋萩の下葉紅葉やあらぬ

代 秀歌 雁を鳴く雁と鳴く雁の中間俗の表に記す

雁なき渡る秋の夜の月の光に数ふべきかな

好忠

金 秋の雁なく雁よりも雁の分よりはるかに

新 もみじ葉の秋はつる時の秀

後撰 雁の中に秋はつる時の雁の中の松に雁なれど

月 おとろへいそぐ雁の鳴くこゑと秋の雁とぞ

鎌倉右大臣

家集人丸

小野

雁

麻

朝秋

鹿

妹

関

朝関の麻

毎朝や鹿

夕や麻

曉の麻

詞 関人のまど辺にとりぬ麻の中に書を送りて慰めたる

新 妹にあるか紅葉の葉のうれなるか

万 いにしへの野ゆふきぎばしりの山にとまる時麻の秀

新 ちぢの葉のまの萩の露しらつゆ紅葉の時麻の時

千 樟麻の妻こ秀をいふ

月 ひかりもまさるとも秋の紅葉きと麻の中に紅葉の

金 光をとりて妹の夕顔に書とい麻の中にて花の

新 なほ花のたり方おもむき書の麻の中に書

代 る物の枯ぶ花はき夕顔の小麻の中にて秋風に吹

金 心ゝとなる月の月新小麻にて秋の秀

千 山里の曉方に麻の中に秋の長夜の長しとや云ふ

代 岩と山の夜ちぢに鳴く麻に書小書やまど

い 山の曉さ書き秋風小紅葉ふくら麻の帰らむ

金 秋と小ふく秀小にぞわくぐる我分に麻の書きつゝ

出羽弁

新恒

家持

基綱

俊範

道因

政平

後恵

恵良

大納言

雅光

小宰相

親房

千 梓弦の音は聞べけれども浸く家の内にて
代 独りのみ聞なれしの秋の夜の月を
今 ひとりぬる寝覚の友秋風の分て寂しき
千 秋の夜は月ぞ長き小鳴る鹿の友
野 山おろしの音のみ
代 妻こふる梓弦の音小夜更て家が出ぐひとしきりぬる
後 遠きたと琴を引る物小梓弦の長くしらべ独鳴
代 秋とゆべさとぞ思ひ永夜長いひきたとえ鹿の
後撰 鹿の音ぞ物思の家ゆ聞ふるを野の草ゆ
野 寝覚して久敷寝ぬ秋の夜は思ひ覚て鹿ぞ鳴
続 分のうき世ぞ思ひ覚の鹿の音小家さへ寒ましき
新 梓弦の鳴ぞ聞くく更ふ山の風の波の音の聞
代 鹿の音ぞ山おろしの音ぞ月ぞ明ぬる人ぞ
後撰 秋風の打吹ぞ小ぞ物思ぬ人ぞ

月前鹿

風前鹿

夕されぬ野の萩ふき吹風ぞ鹿の鳴
金 妻こふる鹿ぞ鳴なる独のみ鹿の山風分ぬ
代 ぬくぬのそぬ小ぬて梓弦の妻ぬ風小寒ぬ
月 ぬ田山鳴ぞ鹿ぬ鳴鹿の寒ぬ寒る秋風ぞ
今 秋風の吹夕ぞ小寒舟山ぞ鹿ぞ鳴る

鹿聲比風

寒き比風

代 三ぬ山おろぬ嵐の音ぞ小妻こふ鹿の寒ぞ
代 秋風小寒ぞ寒ぞ風ぞ鹿の音ぞ梓弦の寒
今 ぞ山の杉の梢吹渡る嵐小鹿ぞ寒ぞ
新 ぞ鳴く杉の嵐や鹿ぞ物思ぞ寒
新 峰小鳴鹿の寒ぞ梓弦の寒

百中鹿

代 小紅葉の妻ぞ山の夕時鳴ぞ秋の嵐
代 夕月夜晴ぞ物思ぞ鹿ぞ鳴
月 ぞ山の秋の鹿小寒ぞ妻ぞ鹿の寒の
後撰 小倉山ぞ鹿ぞ鳴ぞ鹿ぞ鳴

鹿隠霧

霧中鹿

正家
大進
入道前関白 摂政
忠信
朱助
肥後
前関白
作明択王
摂政
経信
赤染
前政
後人丸
侍従

秋の野の草の葉分けて鳴く鹿の声聞くたびに秋ぞ悲しき　鎌倉右大臣

小倉山峰の紅葉ぶ散るなる夕暮かけて時雨降るらし　土佐内侍

嵯峨の峰より鹿の鳴く声を聞くにつけても秋ぞ悲しき　後恵

秋萩のさかりなるべしはは桂鹿なる山の鹿は花の色に妻恋ふる鹿と鳴く女郎花ものがたりする萩の花ちるとぞ聞く　讀人不知

妹萩咲くるなるべしの声聞くに秋の山の鹿は花の色に妻恋ふる鹿と鳴く女郎花ものがたりする萩の花ちるとぞ聞く　立

いつ計り秋の山の鹿は花の色に妻恋ふる鹿と鳴く女郎花ものがたりする萩の花ちるとぞ聞く　躬恒

後撰集　秋の野の草葉小萩の花ちるとぞ聞く　忠見

鹿の声やいつしかとばかりなるらんまだ時雨ぬ小萩が原に　静尊

代　咲おもる小萩が原の秋の鹿の声聞くたびに秋ぞ悲しき　讀人不知

村　女郎花の秋萩の花の散るなる鹿の声聞くたびに秋ぞ悲しき　基良

另　歌園小萩の花の散るなる鹿の声聞くたびに秋ぞ悲しき　大伴卿

代　新さらに思ひの秋の秋風に吹きうつして鹿ぞ鳴くなる　後鳥羽院

東鹿

野鹿

野夜鹿

聞鹿

田家聞鹿

秋風に稲葉吹かれて鳴く鹿の声聞くたびに秋ぞ悲しき　寂蓮

山里の稲葉の風に秋ぞ悲しき　俊恵

秋萩に鹿の声聞くたびに秋ぞ悲しき　讀人不知

秋萩の花ちるなるべしの山田の鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　信実

代　家門の板井をくるる山田小里遠しと荒の鳴らん　朝恵

立　風まぜに小村さわぎて庄園の秋の鹿の鳴くなり　讀人不知

古　秋萩の花ちるなるべしの鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　基俊

代　とはいふものの鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　俊恵

手　女郎花の萩やとの鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　也純

後撰集　秋の野の草葉小萩の花ちるとぞ聞く　忠見

女郎花の萩やとの鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　讀人不知

女郎花の萩の花ちるなるべしの鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　躬恒

続　ちるなるべしの鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　立

金　さく秋の花ちるなるべしの鹿の鳴く声聞くたびに秋ぞ悲しき　躬恒

鹿鳴杜萩

名所鹿

鹿宿萩

り詠草　　経信

鳥屋　　仁和寺宮

夜泊鹿　　後京極

増基

苔寺遠　　讀人不知

近屋　　乾道

鹿聲両方　　俊重

鹿聲繁シ　　陽原王

山屋　　実守

山中夕屋　　伊家

晩ヶ山屋　　家定

山家関屋　　実延

山家夕鹿

山丸屋

代人もまだ薄たえる山里の秋の哀のみぞまさる　惠慶

奥山の紅葉ふみわけ鳴鹿の声聞時ぞ秋はかなしき　読人しらず

形　紅葉せぬ小松の末ばかり吹き来て秋の夕べは鹿ぞ鳴なる　拾遺

代　山深き秋の夕べは鹿の音に目をさましぬる秋の哀　道勝法師

形　萬こる鹿の立ぶ山の峰たゝ秋風ぞ吹　定房

動　山人はたゞ山を出てぞうたゝ山の峰たゝ秋風ぞ吹　逸遊

形　梓弓の勢り奉の山の峰たゝ秋風ぞ吹　和泉

後撰　秋萩の情せ枝奉小立秋人小たるれ　大弐三位

動　岩日山山をたゝ秋奉の上小ぞ秋の哀いまこそ　りぞ

代　鹿こえるとしが峰小秋風ぞ吹　忠家

合　ものづゝ立ぞ小をとる大系のう堅の萩小ぞ鳴　仲実

形　秋の夕小若ゝ秋八ゆ上ゝ若の初見の秋いまこそ　三条入道

代　こゝ秋の秀小ゆ見て出ぞ小見ぬ夏の秋の小ひを　慈圓

秋上三十八

秋の野に小ぞ秋の花の秀ゆ小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　秀能

形　吹ぬ小ぞ小ぞ秋の花の秀ゆ小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　惠慶

代　きく人の秋をとゝ小ぞ秋の浦とゝ小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　任

形　世中と道こそうゝ小ぞ秋の哀り小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　後鳥羽

代　色色の秋の取足小梅の秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　長家

形　色色の秋の取足小梅の秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗教

代　色色の秋の取足小梅の秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　歌女

合　小ぞ秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　深草天

形　小ぞ秋の小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗頼

代　秋風の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗尊

形　秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　後鳥羽

代　秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　大臣

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　土御門院

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　秀能

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　惠慶

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　任

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　後鳥羽

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　長家

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗教

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　歌女

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　深草天

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗頼

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗尊

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　後鳥羽

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　大臣

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　土御門院

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　秀能

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　惠慶

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　任

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　後鳥羽

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　長家

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗教

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　歌女

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　深草天

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗頼

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　宗尊

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　後鳥羽

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　大臣

秋の小ぞ小ぞ小ぞ秋の哀小ぞ見ぬ夏の秋の小ひを　土御門院

山路秋月　　家隆

秋風の袖小萩まく峯の色を翅刈りそめ時や　　燕園△

今　　吉田山秋月今の袖はいとよ木の梢はぐれ雁

月　　郭公とも夜はいうの山の夕月雲の下を　　宗雪

たなびく　　こしの山路やいたらん秋の夕月の光　　義圓△

男　　語ふくるまし里の秋萩を折ふつるえ　　仙弥元

今　　白雲はとゝ人ぬべしいさゝみぬ秋の遊び　　讀人不知

同　　女郎花秋萩おぬぬ棹の多くいさるまとの袖で　　家持

秋　　小ヒとゝゆわゝの山のとゝ小ゝの花ひ　　今

花　　吹風の葉のちぐさ小えゝ行るハ秋のこのくれ　　後人丸

橋　　紅まぎれ風の山の色ゝ見ばおの錦きぬ人ぞ　　と任

于　　さ紅ぐ小ゝぐとる袖袖の花のをこ出てゝ多く　　宗雪

今　　ゝいばらぐさの色小濃れぐゝ袖かうつる萩が花ぐゝ　　長吳△

月　　夕ゝの秋の袖ぐとば花籠まひるとゝ人きぐゝ　　頼輔

ね　　ね色ゝ人ゝ山路の菊の香ハまかいたるゝ年小香ハ　　秋立い△

秋雨　　

野　　

傳家秋興

山中秋興　　

河邊秋興　　

田家秋興　　

山家秋興　　

妹夕　　

秋夕月　　

古　　祇園御の三宮の山秋ゆくべ錦をさる山地紅葉　　忠岑

月　　ゝよゝ振神ゝ人ゝ山で詩田川ゝ紅小ゝ人ゝとハ　　業平

于　　秋の田小紅葉安ゝ山里をゝとゝ小ゝ流ゝ小ゝ紅ゝ　　少ゝ

秋　　ゝ紅ゝのとゝ門田のいゝのゝ小ゝ見ゝ人ゝわゝ人ゝ小ゝ人ゝ　　宗通

代　　ゝ紅ゝ三ゝの山田小ゝ稲ゝ帰ゝ夕日ゝ人ゝ秋の村ゝ　　道慶△

後撰　　ゝ紅ゝ人ゝ木ゝの梢小ゝ紅ゝ人ゝ秋の山里　　中務

後撰　　夕ゝ人ゝのゝ人ゝ紅ゝ人ゝ秋の紅ゝ小ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　讀人不知

後撰　　ゝ紅ゝ小ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　良岑△

代　　ゝ梁の芳ゝ人ゝのゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　宮嗣

今　　深れば紅ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　隆信

ゝ　　何ゝ世ゝ小ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　男顕白

ゝ　　人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　信實

ゝ　　人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　後京極

物　　月の光ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ　　長昭△

秋夕風　　侯爵　宋[illegible]

秋夕雨　　[illegible]　　[illegible]

秋夕雲　　[illegible]　　[illegible]

山中秋夕　　[illegible]　　園房

除山秋夕　　[illegible]　　舜蓮

郊徑秋夕　　[illegible]　　[illegible]

森秋夕　　[illegible]　　家衡

海田秋夕　　[illegible]　　[illegible]方

浦秋夕　　[illegible]　　惠慶

[illegible]所秋夕　　[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]　　[illegible]

山[illegible]秋夕　　雅經

園[illegible]秋夕　　[illegible]

里秋夕　　[illegible]

[illegible]郷秋夕　　[illegible]

澤秋夕　　[illegible]

秋夕情　　[illegible]

[illegible]夕思　　[illegible]

[illegible]夕傷心　　[illegible]

秋夕[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　

代 ことぬれば袖そひるるよべよ秋こそ人ふるひつ〜もれ　　六里家門
仝 うく波寄ふそこたるつ〜の老のとをし〜秋の夕ゝ　　信實
後撰 秋の秋いと山田の庵ふ稲妻の光のこそ社りつわ〜　　伊勢大輔
拾 世中は何ふ光そこゝん秋の田とものふてゝそ寄稲妻　　土御門内大臣
新 月の月清者の袖のこふ人光のめれる寄ゝ稲妻　　家隆
同 風渡る淺茅ゞ宿の寄ふぶよ宿もゝ果ぬ寄の稲妻　　有家
ゝ ゝゝふ物る地とゝ寄ふ〜ふ〜ふ〜の秋ゝのふ〜ふ光ふ〜ふ　　後鳥羽院
仝 稲妻のゝ〜ゝの稲妻いとゞもをゝ〜といひそやゝをかゞるむ　　丹後
冨 稲妻のゝ〜ゝ〜ゝの里ゝ〜ゝ里ゝ〜ゝ里ゝ〜ゝ里ゝ〜ゝ　　ゝ美人ゝ
新 庭の面のこのゝゝ寄ぬねゝ田のゝ〜稲ゝ　　爲家
代 秋ゝ光ゝ〜ゝ〜ゝ田ハ刈ゝ〜ゝ稲ふ〜ゝ　　建保四年
〃 稲の田の刈のふぶよゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ　　具實
古 ゝふ〜ゝ寄ゝ山田をゝ〜ゝ稲寄の寄ふ〜ゝ　　後人ゝ
拾 寄ゝ寄のゝ〜ゝの山田ゝ〜ゝふ世中ゝ〜ゝ　　世ゝ

稲妻

稻妻

稻妻

稻

稲

寄稲祝　穂田

秋花

秋夜深シ

秋花田

秋夜長シ

拾遺　刈てをとる田の稲ぶは絶てまそるうらかれ葉哉（ね）　読人しらず

代　つゝ山田のうへの稲ぶ苅はてゝ霜をまとはぬ袖ぞ見ゆる　躬恒

新　秋をまちうへの為とやゝ色つゞかぶ山田の稲のちゝひそめけん　読人しらず

古　うれる田ぶ刈るひゞのかぶ出ぬ世ぞと文ぶ秋果ねとう

代　ぶ山田のうへの稲のひつゞ雲をくれわぬ袖くぶ　高遠

古　独ぬる床ぶ寒ぶわびぬと秋ぶる音ぶ袖ぶ雲ぶ　讀人不知

今　秋萩の下葉黄付今ぞ雨ぶ　公

後撰　紅葉をとゝとれば秋風の吹ことぞ袖ぬるゝは　在河ぶ

拾　秋のとゝ人ぶ分ぶづめて吹ぶ出でゝ加ぬるとぞ思ふ　読人しらず

代　天ぶ雲ぶうさゝえれば月きゝ雲ぶ秋のとゝ音ぶ文ぶ月ぶ　猿丸大夫

古　いたゝとゝぶ袖ぶ雨ぶ袖ぶ涙ぶ秋のとゝ袖ぶ涙ぶ　讀人しらず

新　紅葉のをゝ袖ぶ人ぶのまゝらつゝいとゞ家ぶ見ぶ袖ぶ　伊勢ぶ

後　ぶ秋のをゝ袖ぶ人ぶ袖ぶ涙ぶ　躬恒

代　吉ぶのゝ山ぶ雲ぶ袖ぶ涙ぶ袖ぶ　讀人しらず

秋夜寒シ

秋花嵐

秋夜霧

題　紅葉のゝ小家ぶ袖ぶ涙ぶ袖ぶ涙ぶ袖ぶ涙ぶ袖ぶ　題知らず

新　紅葉ぶ袖ぶ涙ぶ袖ぶ涙ぶ袖ぶ涙

蛛義

代 曉小秋の行末をも未ねんぜること知くねどぞ

秋雨

代 蛛のとれば義訪小家ぞ遠々〜〜つる秋ひぐ

代 秋の日もそのこゝをも小風立て云を寄〜村雨の

松間雨

今 雨ふらいでの夜ぞ荒ぞ荒ぞ

另 おとぶ秋小ぞれるこゝわしたらい紅葉ぞんる園の

同 秋田苅らの庵小間雨ちゑ秋世ねばたゝ人

後 初雨ふれがらぞ〜ぞいるいぞれの寄ゑ

新 紅のやゝもの置れしぞ秋いふ海ゝと秋ぞ

另 茅枕旅小初りい寄きゝぞ夕ゝまゝゑう雄ゝを

同 秋ぞよゝ蛙〜ぞ〜ぞるる白海小雄うゝや鶏ゝをひどう

今 神戸橋の山小ゝをゝ入りあふ雄鳴ゝ秋といゝんゝを

月 寄〜ぞゝをわゝゝの川乃夕ゝゝぞ雄鳴せのゝゝ

今 ゝす秋の寄ゝゝゝぞ帰雄ゝぞ鳴ゝ川ゝゝを

ゝ ぞ夕ゝ秋ゝを寄ゝゝ

蝦 かえび

亦堂
後人考
為氏
右雅
義京茅
ゝ考人知
今
伊実
讀人不知
同
今
古麿
後人考
右ものゝ

小鷺物

結 家ぞとぞ小あれ毎の紀代わぐきぞかわゝゝを鷺ぞ秋ゝ 亦堂

今 寄ゝ小ゝゝゝゝゝゝれば女命紀毎の秋ぞ春ゝ寄 丹ゝを

後結 秋の秋ぞふゝぞ言物ゝ秋ゝゝ寄ゝ 元輔

月 小ゝゝ寄ゝ人ぞゝゝゝ前の紀稲ひゝゝむ来ゝを

ゝ ゝまゝゝを野ぞ小ぞゝゝ紀ゝの寄ゝゝを紀ゝを 能宣

今 寄の寄ぞ鷺ゝをゝぞゝゝ紀ゝの寄ゝゝを紀ゝを 野ゝを

月 石寄ゝ紀ゝゝ命ゝ紀ゝゝぞ小寄ゝを寄ゝ人の為 おゝのゝ為

ゝ 紀の寄ぞ人ゝき物ゝを中小物寄ゝて 丹ゝて

ゝ ゝひ出ゝ紀ゝくゝ物ゝゝ寄清物の小萩ゝ糸ゝ春ゝ小ゝ紀ゝ 今

ゝ 女命ゝ春ゝ物ゝ小ゝゝ寄ゝ物ゝゝ春ゝ小ゝ春ゝ小ゝ春ゝ ゝ春ゝ

ゝ ゝゝゝ紀ゝゝゝゝゝゝ

駒引

関路月

月

後拾　ちらのくれ逢坂の関はいかゞ越ぬらん　原縁

〃　逢月の駒引こゆる関の板の木の下陰ぞ有ける　重茂

金　東路は逢坂出る逢月の駒引こゆる関の板まの月

詞　逢坂の板まの月はまちもせぬいくたの駒といそぎ来ぬ　仲正

新　東路の逢坂の山こえて新小町の月のまま　定家

古　何せんといそぎ立らん逢坂の関わすれぬ月の影　後京極

金　関坂の関の月見ぬ秋夢の寄ぬ月ぞ　順

新　逢坂の関の月見ぬ秋夢の寄ぬ月ぞ　讀人不知

後拾　逢坂の関の岩ぐゝ清水の出ぬ駒引こゆる月　雲家

金　駒引の関の月ぞ清水の出ぬ駒引こゆる月　高遠

新　わすれぬ逢坂の関の清水の新ぬ駒引こゆる月　隆經

古　逢坂の関の月の新ぬ駒引こゆる月ぞ　長実

後拾　逢坂の関の月の新ぬ駒引こゆる月　公

大　逢坂の関の月の新ぬ駒引こゆる月　湖月

後拾　逢坂の関の月の新ぬ駒引こゆる月　為善

妹月明

金　うれまくおいとゝ分こゆる秋の月　堅実

詞　鏡山峰より出る月ぞ　紀伊

新　鏡山峰より出る月ぞ　房実

新　鏡山の山ぞ流れ清くいとゝ秋の月　朝臣

新　いとゝ秋の月の星ぐき小倉の山ぞ流れ　千里

新　秋の月いかゞ何とゝ秋ぞ　小町

新　大の系ぐ秋の月ぞ　宮内

代　萬代のゝ秋の月ぞ　大輔

古　ゝの月の桂ゝ秋の月　実方

金　いるゝ秋の月ぞ　永縁

後拾　いるゝ秋の月ぞ　也能

詞　いるゝ秋の月ぞ　大大臣

金　いるゝ秋の月ぞ　家隆

新　秋の月ぞ　史蔵人

待月

秋月添実

金

詞 ものとかいふ詩歌なる月とのことまつとなくもなくなくなくべきなる
秋の夜の月待ちあかしてしかもいやる山嶽こそ
形 ながめてぞなるとなるとものいふ
ねるなる妹の夜の月待ちなどの山井
いのくるかをの横ぎる音のまへ出でて月ぞ粧まかせる
新 山をのかなるしぞうらうる月ぬしてくる白雲の光り
今 月新とんのうらふまつなどいうこの光る詠ぬ
万 かなこうの宮国山ぬをみて出くる月のおくく雪筵
千 秋の月を根のもとのわるこふ光時りをの雲る結ぶ
同 待ぞといとぐんぞぐさもねおど松山の月の月
形 山端を出でかをる月待と待ぬるのいく交かるる
続 山のこれ山にのあか移る月ぬ浪のトかまつ
信 宿ごとかうるねるのいく端の月待ぞのぬやう
万 山に端かいざ月と出んと待つをるかぬ夜で交り終
金 をぬの月まつ松のうつて松山端のこぞ愛よ
えん宮

正季
素之
小次郎
兄国
後京極
九條
坂上郎女
法性寺入道
六条
為時
中務
かぬ変なかつ
讀人不知
ちはつた

射山待月

射水待月
毎家待月
深夜待月

魚待月

久待月
待月見月
見月

年三月

毎秋見月
深夜見月
毎夜見月

形 秋のとに長ひをそうるる待かをぬる月の月
代 秋いつるねといいとと月新をとる秋とくぬねべよら
今 ぞ秋のひるの秋月待人の為かをぬ宮
待 ひびねるやりん秋の秋月の光れわ人きまで
信 ぬ深ざをの光れせでをかぬ待よるぞ出る月ぐげ
詞 秋のとに家ひるねる月ぬそ長ぬ家れる角
千 秋ねそ月ぬすぐむる秋のとへ何事ぬは山ひ秋ぬ
形 光のやるへいるんどぬ秋のとへ月そてぬべよ花秋せ
続 いにとそ月かわくとへるんぞ秋とるんぞ秋ぬ
新 歌ぞうるとり秋かわひねんるるねぬ月の新を詠め
代 地ぬへとと秋の月へるるるぞうぬ世の秋の浦り
今 宮ぬるうと何ぬひ名年秋どか月へ行ままぬでる
形 ぬるそわくぬかるを秋の秋ぬをぬ月を物そしるる
ぬ わくぬて神ぬの苔の代るを月かるへ秋家のさ

史純
素之
聖武
素之
小弼
堂孫
具京歌王
永宗武ア
教長
小侍従
信生
後鳥
光廉
後成

連夜見月

続若月

聞見月

待見月

獨対月

歌月

代春日山峰の霞小きくれて四月ぐ山嵐さえたる
続春のまれ年四月と入しねを詠でわるとも明のえ
代わるどそうみ入せで夕月秋もの夕べ秋詠んば秋ハわくるくたちんばらう
後撰秋はじぐ夕べ夕月を詠るハ拾ひ入れのつぎ小ぐ見る
金山ゐるうら入まで月ハ詠るハ拾ひ入れのつぎ小ぐ見る
代ぬのぐるハ夕べ夕べ入ぬ夕べ(筑紫のちをねる秋のこ月
金詠よ小菜葉の秋ハ秋ハ拾ひ入ぬ夕べ秋の秋ハ
千さび山小菜ハいぐ増うら色拾ぐ月ハえぐうら月
いい拾のこ色るかと我ぐねる人小ヒ秋の月ハ詠せぐ
形人ぐうハいの浪ぐ月ハ詠ぐ月ハ詠
代詠ぐ月ハ色といひ色て拾ぐ家のぐ山詠
男わ小まを月を入をとぐまいをせんと秋のぐ山詠
月いのぐをひてん月ぐハ序ぐうぐ小ぐと秋小ぐうぐ秋ぐ
後撰ぬの西小ぐ見る月のぐ夕べ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ

摂津
り盛
れ掃
振川右
秋光
中納言
弘仲め
弘昭へ
永宗式部
振川右京
入道家摂政
陽東王
讃人不知
順

結あぐのこ夕べ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ秋のぐ
金偽小ぐうぐ小ぐわぐ月ぐ秋ぐこのえる斗一人小ぐうぐ月
続代ぬる人のぐハ夕べ小ぐわぐ夕べ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月
代ぐ夕べハ夕べ夕べ小ぐうぐ夕べ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月のぐ月
金ぐ夕べ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ入ぬ夕べ
後撰秋の秋ぐ月ぐ夕べ小ぐ秋ハ夕べ秋ハ夕べ秋ハ夕べ秋ハ夕べ秋ハ夕べ秋ハ夕べ秋ハ夕べ秋ハ夕べ秋ハ夕べ
金三笠山光ぐ夕べ夕べ出ぐ夕べ夕べ夕べ

駒月

秋、駒月
朱出月

月初出

初昇月
斷昇月

傳午月
影傾月

秋
妹の美へ難かりしく為なれど秋の月多
新
秋の三日家を出でそめ家を出でそめ
代
きおるとうれて義の秋の月新
代
秋のうへよりすぐれしと秋の月
代
秋のうへよりすぐれしわぐかぐ月
代
秋ぞ小歌とる月へ妹ぐれる三笠の山ふとてもうつ
秋
三笠の山のわきふきを人へまぐ秋の月と
続
相坂の松まとおそもむれ音羽の山月や出でぬ
新
村雲の峰ふつるを沢とめて山のうつる月げ
代
愛宕やる園山の秋風り雲峯をいづる月かな
代
元亨法皇の秋風り山の上にうつる月とうるい
金
代
山のとふ雲の長沈ぬぎ捨て独り月の上のぬるる
代
三笠山三笠のとはひひ山遠ふ月の沈ぬふ
新
さを中と秋の夜ぬ月のうつるを月のうつる
後拾
月新のうつくまふ沈みぬまぐるとふひるるれ

武子内親王
実の昭へ
出雲の流
赤文字
藤原小朱
三條院
親經
式部卿白
後鳥羽院
前右政
宗
崇徳院
讀人不知
良選へ

傾月

歌入月

惜入月
入月

入後嵯峨月

続
秋の秋ぬ沈ぬる月られ山ぬ
代
妹の夜ぬ雲て夜ふ山るるを沈の山嶺ふ
金
妹風ふ秋の夜ぬ山ぬ月ぬ
代
いとまぐ山ぬ月ぬ
後拾
ふ沈ぬわぐ月ぬ月ぬ
同
月新の入を沈む月ぬ月ぬ
野
霧のまふ月ぬ月ぬ月ぬ
代
後撰秋ぬ月ぬ月ぬ月ぬ
金
月ぞ月ぬ月ぬ月ぬ
古
わぬふまぐ沈月ぬ月ぬ月ぬ
代
入まぐ沈月ぬ月ぬ月ぬ
新
しるれば沈ふ出ぬ月ぬ月ぬ
古
わぐぬ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ
千
月新の入ぬる後ふ月ぬ月ぬ月ぬ月ぬ

赤文字
右御門院
鎌倉右大臣
如仲
永原へ
立信卿
式子内親王
寂蓮へ
為家
業平
和泉式部
ヤ実
讀人不知
菅原へ

妹上四十七終

続
月の入るわたるの星ぐとと長年八分ゆくすえ　惠ゆ